

## 後ろ手と隠し刃

### 一

とりあえず五週間待った。それぐらい待っていれば、自分の感覚が研ぎ澄まされるかと思っていたからだ。しかしそれも浅慮、抜かりに気づき、結局自ら重い腰をあげた。

ハイヒールの音を聴きながら階段を上ると、視界が開けた。空は段々畑のような曇り空が広がり、雨の匂いが鼻腔の側を通過していった。悪天候による人影の少なさは、やはり私は出遅れてしまったのだと、疑心の後押しになった。生ぬるい秋風にさらされながら、静かに足音だけを響かせながら歩いていった。あまりにも静かすぎて、足音がその空間を等間隔に区切ってしまったのではないかと不安になるほどだった。

### 二

「ツバメを飼ってる、と言っていました」彼女は十八歳だった。私と六歳離れている。つまり私は七番目だということだ。

「ツバメ」抑揚をつけずに復唱した。

「はい、もちろん、暖かい季節の間だけ飼っていたそうです」彼女はアイステイーの入ったグラスを温めるようにして両手で包み込み、指を組んでいた。きつと怯えさせてしまっているのだと思うと、僅かに罪悪感を感じた。

「最近は会った？」

「一ヶ月ほど会ってないです。音信も途絶えてしまいましたから」

私はといえば、コーヒーを定期的に、決まった量を少しずつ飲んでいった。そのようにしてマグカップの内側に、寂れた線を等間隔に刻んでいった。遠くで雷が鳴り始めたので、雨が本格的に降り出す前に、彼女を解放した。

### 三

小雨がまつ毛に絡まった。ゆっくりと瞬きをして雫をほどいた。私はこれほどまでに腹が据わっていたのだろうかど勘繰っても、昔のことが思い出せなかった。まさに今を生きている、という感じだ。というより昔は生きていなかったといったほうがいいのかもわからない。

彼が連れてきた猫はナナという名前だった。ナナは、七だ。これ以上言うことはない。彼が居なくなっただけで私と私が一人で育てていたナナは、今は完全に私に懐いている。扉を開けるとナナはいつも玄関のカーペットに座ってこちらをみている。いつかはこいつを鍋にして食ってやると決心してから数ヶ月は経っている。適当に餌をやってから私は布団に潜る。普段と変わらないはずの敷き布団の硬さが気になった。ナナの鳴き声を聞きながら

つの間にか眠っていた。

#### 四

最近はずらーんをかけなくても自然と七時に目がさめるようになっていた。体内に他人が侵食しているようで、寝覚めは良くない。山脈のように連なるシーツのシワを十数分眺めていた。やがてそれが不毛であることに気づいて、ちっとも滑らかではない動作で起き上がった。カーテンの隙間から差し込む弱々しい日光で、部屋に舞う埃が照らされていた。それ以外の空間は全て暗かった。運動を終えた液体のように、疲労は少しづつ下に流れ溜まっていった。

ナナの姿をかき消すように扉を閉めてから一呼吸置いて、外の空気に自分の身体を馴染ませた。そのまま何も考えずに歩き始めた。

午後から再び雲行きが怪しくなり、風が冷たくなった。前かがみになってベンチに座り、浅く呼吸をしていると、体の中まで外界にさらされている感覚に陥った。さすがに恐ろしくなって、勢いよく立って伸びをした。そこまで心地よくなかった。公園は子供の叫び声で賑わっていたが、私には何の意味も影響もなかった。呼吸を止めていたからだ。体とそれ以外という二つの空間で区切られている状況から逃げるようにして公園を去って、詰まっていた息を吐いた。次に吸った空気は雨の香りがした。

次に意識を取り戻したのは電車の座席に座っている時だった。寝覚めのように悪い気分でもなく、数ヶ月前のように良い気分でもなく、微妙なわだかまりのみをはっきりと感じていた。そのわだかまりに激しい嫌悪感を抱いて、内臓もろとも身体の中にあるもの全てを吐き出したくなった。けれど身体的に気分が悪いわけでもないで、嘔吐できるはずもなく、そのまま肅々とわだかまりを育ててやった。猫の背中を撫ぜるようにして、目に見えないものにゴマをすっているみたいだ。

#### 六

「何でそんな渋い顔をしてるの？」

「非対称の模様は嫌いなんだ」

「何で？」

「だらしないから」

「でも非対称のデザインなんていくらでもあるよ」

「すべてが均等に並んでないと落ち着かないんだ……。ほら、このコップだって、青いラインがきちんと整列してる」

「私には一生涯理解できない」

「理解しなくていいんだよ、これを眺めて、ただ安心するだけで十分さ……」

そう言って彼の指は律儀な動作でコップの模様をなぞった。

## 七

一人分の食器を洗っていると、左手の中指にささくれができていることに気が付いた。濡れるたびに沁みるが、沁みるたびに慣れていった。皿についている均等な線に触れると、微かな凹凸を感じることができた。洗い物が終わると、部屋の片付けを始めた。何かを忘れるために動いているのではなく、体が忘れないために、本能的に動かされているような気分だった。ナナはベッドの上で眠っていた。カーテンを開けても星空は見えなかった。ここ最近はずっと曇り空が続いている。ひとしきり綺麗になった部屋の中で深く息を吸った。再び身体が空間に飲まれるような感覚が怖くなって、細く空気を吐いた。

## 八

次の日は小雨が降っていた。傘をささずに家を出て、電車に乗った。湿気がこもっている車内は息苦しく、曇った窓を傍観していた。汗でシャツが身体に張り付く感覚が気持ち悪かった。再び身体が何かに取り込まれようとしている感覚に似ている。もしも身体が吸収されてしまったら、果たして何が残るのだろうかと考えただけで顔をしかめた。

土曜日は美術館に行った。その日も曇っていた。だんだん日光が恋しくなってきた。いくつかの絵画を観てから、近くのカフェで昼食をとった。洒落た店内だったが、サンドイッチが不味くて、しばらく味が口の中に残った。そのせいなのか、午後は気分が良くなかった。とにかく楽しいことを探そうと思って、雑貨屋で猫の形をした箸置きを買った。顔が少しナに似ていたからだ。

家に帰る途中に雨が降ってきた。動じずに折り畳み傘を出して、雨粒よりも静かに歩いた。少しずつ靴のつま先に雨が染み込み変色しているのも無視して、軽く鼻歌を歌いながら水滴を前に飛ばしていった。どこから飛んできたツバメが歩くスピードを追い越して行き、再び知らぬ方向に行ってしまう背中を見つめた。しばらく歩いていると雨は止み、どこかで虹の出現を喜ぶ子供達の歓声が聞こえた。ツバメはもう見えなくなってしまった。虹を作っていた微かな日光はすぐに消え、再び曇り始めた。

## 九

晴れと異変は突然訪れる。確かな輪郭を持つ日光が顔に刺さり、無理矢理目が冴えてしまった。床の冷たさに身体を震わせて、口の中の気持ち悪さに為す術もないまま朝食をとつ

た。身体は何かに取り憑かれたように、黙々と朝の支度を進めていくが、意識は置き去りにされていた。頭の中は朦朧としていたが、身体とそれ以外が均等な直線で線引きされていることだけははっきりと感じて取れた。しかし抵抗するでもなく、生活の営みを展開していった。側から見ると幸せな状況なのだろうが、最悪な気分だった。

家を出る前にコップに牛乳を注いで、一気に飲み干し、時計を見る。今度は意識の方が冷静に戻り、日曜日であることに気づいた。その瞬間、吐き気に襲われて家を出た。身体がその空間にいたたまれなくなったのか、それとも身体が空間に巢食われて意識的に拒絶したのやも知れないまま、ずるずると身体を引きずるように歩いていった。

## 十一

代々木を過ぎたあたりから一気に身体が熱くなり、身体が重くなっていった。力も込められない指先でつり革を掴んで、隅に体重を持たれかけた。一瞬でも気を抜いたら、何かを失って、戻れないような気がして、必死で地に足をつけるために電車内を眺めた。とにかく何かにすがりついて潰れないように、結婚指輪をつけている人を数え始めた。その行動に深い意味はない。探るようにして顔をあちこちに向けながら、誰彼構わず左手の薬指を確認した。空いている指を折って数えていたが、数も途中で忘れていき、最終的にはただただ指を順繰りにストレッチしているだけになってしまった。そんなことをしている間にも、窓から差し込む日光は角度を変え、意識を刺す刃も次第に細くなり、軽く鋭く続いていた苦しみ、は重くしつこくなっていた。朝日が失せる前に、電車を降りた。

## 十二

吐瀉物で下水を白く染め上げてから、再び歩き始めた。近くの自動販売機で買ったミネラルウォーターで口をゆすいで吐き出した。日光を浴びて歩いた跡に影を落とした。後ろで両手を組んで、一歩ずつ丁寧に足を出しながら、小気味良く進んでいった。勿論、酷い気分だった。等間隔に並ぶ電柱を俯瞰しながら、未だにみたこともない目的地に向かっていった。親指でささくれをいじって、不器用に引き抜いた。加減を間違えて血が滲み、すぐに左手が濡れた。次第に視界も滲んでいって、右手も濡れた。

その日は結局何も得られずに、そのまま家に帰ることにした。帰り際に、雑貨屋に入って水色の食器を買った。水玉模様の付いている皿だ。

「見て、新しい食器を買ったの」水玉は大きさが不揃いで、整列せずに方々に散らばっていた。ナナは私の胸中などに全く興味を示さず、大きなあくびをした。